信頼関係を築き、どんな壁も共に乗り越える

――岩手県 JAいわて中央

担い手の下に集積される広大な農地。規模が大きくなればなるほど、生産基盤を見える化し、よりよい経営をめざした改革がつねに求められる。学びの姿勢と熱意あふれる訪問活動で、この人ならどんなことでも相談できると信頼されるTAC（地域農業の担い手に出向く担当者）の活躍に迫った。

鈴木加寿彦＝写真 *photo by Kazuhiko Suzuki*　JA全農TAC・営農企画課＝企画協力

勉さんが「地域を巻き込んだ農業にしたい」という思いを、F（藤村）、S（下久根地区）、クルー（家族や地域の仲間）の名前に込めて、2016年に法人化。経営は、水稲、小麦、ネギなど計40.5ha。写真中央が勉さん、その右後ろが裕介さん。TAC、社員や業務委託で作業を依頼するみなさんと

岩手山を始めとする美しい山々を臨む圃場は、雪に覆われ、晴天の下、キラキラと輝く。

農事組合法人FS・クルーをJAいわて中央営農販売部担い手対策課のTAC・米田（まいた）菜摘さんが訪ねると、長ネギの調製作業の真っただ中。代表理事の藤村勉さん（68）、息子で専務理事の裕介さん（45）、その妻で常務理事のなぎささん（32）が迎えてくれる。

「ここに来ると、あっと言う間に一時間くらいたっています」

そう話す米田さんに、なぎささんがほほ笑む。

「経理を担当して四年め。やっとのみこめてきましたけど、質問攻めにしてましたからね（笑）。米田さんはその場で答えられなくても、帰って詳しく調べ、かならず答えてくれます。だから安心して相談できるんですよ」

米田さんは二〇二〇年、岩手県への移住をきっかけにJAいわて中央に入組。翌春からTACになった。ほどなくして勉さんから、「農地集積などで管理面積が増え、作業が間に合っていない。今後の営農計画や栽培管理などをいっしょに見直してほしい」と相談された。米田さんはこう振り返る。

「こちらの法人では、Z-BFMとZ-GIS（ページ下参照）を一九年から導入し、活用しない手はない。でもわたしはシステムに不慣れで、一から勉強する必要がありました」

信頼関係がなにより重要

TACミーティングですぐに情報を共有し、同法人の前任の担当TACである玉山正彦さんに指導を仰いだ。熱心に学び、関連部署などからの情報収集に奔走する米田さんに、玉山さんはこう声を掛けた。

「Z-BFMは担い手の経営に関わる詳細な情報をすべて共有しなければならい。そのためには担い手とTACとの信頼関係がなによりも重要だ」

不安を払拭するためには、焦らず農家と向き合って話し、圃場を前にして共に考えることが一番だ――。玉山さんは自身のTACとしての経験から、そう確信していた。

そして、米田さんは訪問を重ねた。勉さんの「若い世代にどんどん経営を任せたい」との思いから、Z-BFMによる二一年度の経営分析はなぎささん、Z-GISの圃場データを活用した二二年度の経営計画策定は裕介さんを中心に担当。JAの関連部署とも連携し、生産基盤の見直しを進めた。

その結果、品種・品目の集約、作目配置の見直しによる作業の効率化、資材量と注文方法の適正化に成功。臨時雇用から作業委託への転換により、人件費も削減できた。また、同法人のZ-GISの情報をJA営農センターが共有し、法人に寄り添ったタイムリーで適切な営農指導ができるようになった。

経営の地固めができた今、裕介さんは展望する。

「自分たちのためだけではなく、地域の農業を未来につなぐために、どんな経営をするのか。子どもたちが憧れるような魅力ある農家の姿を見せたいですね。そのためにも、米田さん、これからもよろしくお願いします」

同法人のさらなる躍進に向け、米田さんは姿勢を正した。

「米田さん（写真奥）がうちのお米を直売所で買って食べて、『すごくおいしかったです』と伝えてくれたとき、とても励まされた」となぎささん（手前）。経営計画に販路の拡大を盛り込んでがんばっていたため、忘れられないひと言になったそうだ

JAいわて中央

盛岡市・紫波町・矢巾町が管内。奥羽山系と北上山系に囲まれた豊かな大地で、水稲は『ひとめぼれ』『ヒメノモチ』『銀河のしずく』を核に20種類を生産。輸出にも注力するリンゴや、野菜類（ズッキーニ、ミニトマト、ネギ）、菌茸類、ブランド牛『しわもちもち牛©』など、特産の農畜産物は多岐にわたる。

JAいわて中央のウェブサイト

ベテランから新人TACへ事業承継でスキルアップ

JAいわて中央では、管内を4つの地域に分け、各地域に専任TACを配置する。週2回のTACミーティングの他、営農センター内でも綿密な情報共有を行う。前任TACや営農センター各課の職員と同行して担い手を繰り返し訪問し、現場での業務を通じて学ぶOJTを実施。マニュアルや研修だけでは身に付けることが難しい実践的なスキルの習得を可能にしている。

地域共生に貢献する労働力不足への対応

JAいわて中央のTACはJA無料職業紹介所と連携し、現場に出向いて生産者と被雇用者のフォローを行っている。昨年度は地元障害福祉サービス会社に協力を求め、農業法人との作業受委託の取り組みにも挑戦した。労働力確保と同時に、地域の発展や共生社会の実現につながることが期待される。農家の状況を的確に把握するTACだからこそ、経営にとって理想的な雇用を提案できる。

玉山さん（写真）は、「事前に相手についての詳細な情報収集を行い、担い手への理解度・解像度を上げることで、相手の意見・要望を正確にくみ取り、寄り添った提案ができる」と、同行訪問を通じて米田さんに伝えてきた

イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで（https://www.zennoh.or.jp/tac/）

Z-BFMとは

農研機構とJA全農が共同開発した営農計画策定支援システム。経営面積、労働力などの経営概況を入力し、データベース化した各作物の経営指標（粗収益、変動費や作業労働時間など）を使い、農業所得が最大となる営農計画案の作成が可能。

Z-GISとは

JA全農営農管理システム。圃場の情報をインターネット上の電子地図にひも付けることで、作業の効率化や情報の共有に役立つ。
https://z-gis.net/99/

［じっくり話し合おう］Z-BFMやZ-GISを使ったことがある仲間に感想を聞いてみよう